

ポスト・タイラーのカリキュラム開発論の構築に向けて

——Kliebard, H. (1970), The Tyler Rationale, *The School Review*, 78(2), 259-272——

若松 大輔

カリキュラム開発論の「金字塔」であるラルフ・タイラー (Tyler, R.) の『現代カリキュラム研究の基礎 (Basic Principles of Curriculum and Instruction)』の初版が出版されたのは 1949 年である。したがって、70 年以上の月日が流れたことになる。日本で翻訳が出版されたのが 1978 年で、アメリカでは 2013 年に再版もされている。ピーター・フレボウィシュ (Hlebowitsh, P.) は、2013 年版の序文の中で「この小さな著書は、世界中に読者を見つけ、就学前施設からメディカルスクールまで様々な学校という環境におけるカリキュラム開発の取り組みを推進しつつ、遍く旅してきた」(Hlebowitsh, 2013, p.vii) と述べている。このように時代と場所を越えて読み継がれているタイラーによるこの著書で示されたカリキュラム開発論は、——ウィリアム・バイナー (Pinar, W.) が、1920 年代半ばにはすでに共有されていた考えであり、タイラーによる「盗用」だと厳しく糾弾したが——いわゆる「タイラー原理」として知られている。タイラー原理は、カリキュラムを開発する上で求められる次の 4 つの問いを中心としている。すなわち「学校は、どのような教育目的を達成するように努めるべきか」「どのような教育的経験を用意すれば、これらの目的は達成できるか」「これらの教育的経験は、どのようにすれば効果的に組織できるか」「これらの目的が達成されているかどうかは、どのようにすれば判定できるか」である。

日本の学校現場でも「カリキュラム・マネジメント」や「逆向き設計」論として、——しばしば知らず知らずのうちに——タイラー原理の発想は浸透しつつある。しかしながら、タイラー原理を十分に清算した上で新たなカリキュラム開発論が構築されてきたわけではない。そこで本稿では、ポスト・タイラーのカリキュラム開発論の構築に向けて、ハーバート・クリーバ

ード (Kliebard, H.) による代表的なタイラー原理批判の論稿を紹介したい。

1. 文献要約

クリーバード「タイラー原理」(1970 年) の目次は次の通りである。目次から明らかであるように、タイラー原理の 4 つの問いを取り上げてそれぞれにコメントを付している。

教育目標の選択 (The Selection of Educational Objectives)

目標の情報源としての教科 (Subject Matter as a Source of Objectives)

目標の情報源としての学習者のニーズ (Needs of the Learner as a Source of Objectives)

目標の情報源としての現代生活の研究 (Studies of Contemporary Life as a Source of Objectives)

哲学的篩 (The Philosophical Screen)

学習経験の選択と組織 (Selection and Organization of Learning Experiences)

教育評価 (Evaluation)

要約と結論 (Summary and Conclusion)

冒頭でクリーバードは、カリキュラムの領域で最も根強い理論的定式化がタイラー原理であることを示した上で「タイラー原理の公刊から 20 周年であることは、恐らくその中心的特徴のいくつかを再検討・再評価するのに適切な時期である」(p.259) と宣言する。タイラー原理は、問いの形で提示されているものの、それらはカリキュラム開発におけるよく知られた次の 4 つのステップとして再定式化されているという。それは「目標を記述すること」「『経験』を選択すること」「『経験』を組織すること」「評価すること」である。そして、彼は、最も重要視されている最初のステップである目標の記述についての再検討から始める。

「タイラーによる教育目標の篩は、目標の 3 つの情

報源の記述、つまり学習者の研究と現代生活の研究と教科専門家からの提案の記述と、どのようにこれらの『情報源』から導き出されたデータが哲学的および心理学的な『篩』を通して『濾過』されるのかの説明からなっている」(p.260)と整理した上で、各「情報源」は、それぞれに理論的根拠や独自のレトリックを有するカリキュラム分野の立場であり、これらの立場をすべて排除していないことが、この原理が人気を博してきた理由の1つだと述べる。しかしながら、「単純な折衷主義が、理論化を進める上での最も有効な方法であるとは限らない」(p.260)と説く。

クリーバードは、3つの情報源の中で3つ目の「教科」が異質なものであることを説く。端的に言ってしまうと、「教科とは、主として職業上の要求のような個々人のニーズを満たしたり、社会的期待を満たしたりする、いくつかの手段の1つである」(p.262)のにも拘らず、タイラーは、教科を手段ではなく教育目標の情報源として数えてしまっているのである。このような誤りは、タイラーによる十人委員会に対する誤読に起因するという。十人委員会は、「古典」「現代語」のようなプログラムの中でどのような内容や方法を用いるべきかを提案していたのであり、タイラーが用いるような目標という概念は用いていないと指摘する。

「学習者のニーズ」と「現代生活」の研究を教育目標の情報源として扱うことには、双方が同様の問題に直面するという。これらの調査から直ちに目標が導き出せないことはタイラーも自覚していた。たとえば、読書の習慣に関する調査で60%が漫画しか読まないということがわかって、ここから直ちに教育目標が設定できわけではない。クリーバードは、「いずれの場合『学習者のニーズの研究と現代生活の研究』も、タイラーは、この情報源の深刻な欠陥を意識しているが、しかし次のように乗り越えられようと仮定している。第1に、排他的にそれらのただ1つにのみ依拠しないようにすることによって。つまり批判を避けるための彼の折衷主義に頼ることによって。第2に(おそらくより重要なことである)、彼は、あらゆる不足を補うための手段として哲学に訴えかける」と述べ、タイラーによって教育目標の濾過装置として捉えられた「哲学的篩」に関する検討に続く。ジョン・フランクリン・ボビット(Bobbitt, J. F.)が数多の目標からコンセンサ

スを得るための手段を「思慮深い人々の共通判断」に求めるしかなかったが、「タイラーの訴えは神聖な哲学へ向くものの、哲学に到達する方法や篩に掛ける過程に参加する方法が依然として暗闇の中にある限り、その努力は同様に恣意的である」(p.266)と批判する。つまり、タイラーは、教育目標を設定することが教育の哲学と一貫性を有するように述べるものの、目標の選択も哲学の選択も同様に恣意的であり、タイラー原理には目標を選択する際の基準(criterion)が存在しないのである。教育目標が教育の哲学に由来するということは否定できないが、そのことは実際には何も教えてくれないのと同義であると指摘する。したがって、「教育目標が哲学的篩を通して濾過されるというタイラーの提案は、明確に間違っているというよりも、至って平凡な、ほとんど空虚なものなのである」(p.266)ということになる。

タイラー原理は、教育目標が設定されると次のステップとして、目標を達成するための手段としての学習経験の選択と組織という局面に移る。クリーバードは、「学習経験」という概念に着目する。彼は、「問題は、学習経験が、生徒と環境の相互作用として定義される場合、どのように選択されるのかということである。定義からして、生徒の知覚・関心・先立つ経験のある種の機能である。少なくとも学習経験の部分は、教師が選択する権限の内にはない」(pp.267-268)と述べ、学習経験を統制できるというタイラーの主張に秘められた「パブロフ的含み(Pavlovian overtones)」について十分注意が払われていないことを批判する。

そして、最終局面である「教育評価」に関しては次のように批判を展開する。まず注目するのは、行動目標で記述された当初の期待に照らして実際の結果を評価する営みにおいて、タイラー原理における教育目標が、活動の終着点として捉えられているのかどうかという点である。クリーバードは、ジョン・デューイ(Dewey, J.)による行為の中で目的(ends)が生成・機能するという主張を援用して、「もし目的が活動の内においてのみ生成されるとしたら、活動(学習経験)が始まる前に教育目標をどのように設定するのかは明らかではない」(p.268)と指摘する。この論点は、単にタイラー原理のプロセスにのみ影響を与えるのではなく、理論的根拠全体に影響を与えているという。す

なわち「たとえば、カリキュラムと指導のモデルによって出発点となるのは、教育目標の記述ではなく、活動（学習経験）であるということの意味したり、どのような教育目標が立ち現れるかは、新しい次元に付け加える手段としてその活動の内に生じるだろうということの意味したりするかもしれない。このような状況下では、教育評価のプロセスは、期待される結果と実際の結果をつき合わせるのではなく、その活動それ自体に対する卓越性の基準を描き適用することとして見做されるだろう」（pp.268-269）と説く。また、クリーバードは、リー・クロンバック（Cronbach, L.）を引用して、教育評価にとって記述の重要性を主張しつつも、期待される成果と実際の結果を比較して効果的か否かを判断するのではなく、「教育活動あるいはあらゆる活動の最も重要な次元は、完全には計画できないものや全く期待されていないものかもしれない。この事実を無視する教育評価の手続きは明らかに満足できるものではない」（p.269）と述べる。

最後に、クリーバードは、本論文で展開した批判を次のように要約している。すなわち、「タイラー原理におけるすべてを左右する重要な最初のステップは、教育目標の記述である。教育目標は、3つの情報源——学習者の研究、社会の研究、教科専門家からの提案——から引き出される。これらの情報源から引き出されたデータは、哲学的篩と心理学的篩を通して濾過されるのである。以上の検討から、3つの情報源の最後のものは、全く情報源ではなく、他の2つから引き出された教育目標を達成するための手段である。学習者と社会の研究は、哲学的篩上の情報源としての立場に非常に大きく依存しており、実際には、教育目標の性質や範囲を決定するのは哲学的篩なのである。翻って、教育目標が哲学から引き出されると述べることは、人が価値観に関連する方法で教育目標について選択しなければならないと述べているに過ぎない。このことは、教育目標を選択するプロセスについてほとんど何も言っておらず、事実上無意味である。カリキュラム作成における最初のステップは教育目標の特定化であるという、カリキュラム理論家による長年の主張は、果たしてどんなメリットがあるのだろうか。主張されているように外在的な目標が学習経験の操作を通して到達されると表現する場合、教育目標をしっかりと設定す

ることがカリキュラム計画のプロセスを認識する実り豊かな方法であるかどうかはそもそも疑問である。…最後に、教育評価が教育目標と成果をつき合わせるプロセスであるというあまりに短絡的な主張には、不十分な点が多い。顕在的で予想された成果を優先させると、より重要な潜在的な結果であるかもしれないものを無視してしまい、目的と手段の重要な関係を矮小化してしまう」（pp.269-270）というのが、本論文でのクリーバードによるタイラー原理批判の要点である。その上で、タイラー原理は、カリキュラム開発における合理主義の立場であり、ある意味で「不滅（imperishable）」であると指摘する。すなわち、工学的な発想の人々にとって、何らかの形でカリキュラム開発のモデルとして存在し続けるだろうと述べている。しかしながら、タイラー原理がどのような理論的根拠に拠って立っているのかを認識する必要があると警鐘を鳴らしている。つまり、タイラー原理とは、カリキュラム開発の「唯一」の普遍的モデルではなく、カリキュラムがどのように開発されるべきなのかに関するタイラーによる1つのバージョンであることを認識しなければならないのである。

2. 文献解説

クリーバードによるタイラー原理批判のポイントは、前節の最後に彼自身による明解な要約を長々と引用したため、改めて確認する必要はないだろう。そこで本節では、クリーバードの論文が発表された1970年代がタイラー原理の問い直しの季節であったことを確認していきたい。

1970年代における北米のカリキュラム研究は、一方でマイケル・アップル（Apple, M.）らに代表される社会科学へ接近した批判的教育学の流れを、他方でパイナーらに代表される人文学へ接近した再概念主義の流れを生んだ（米村、1994年；澤田、2019年）。これらは、カリキュラム研究の拡張を通じた、カリキュラム開発論の解体として機能したと言える。しかしながら、カリキュラム開発論が完全に霧消したわけではない。

「カリキュラム分野は瀕死の状態である」というセンセーショナルな書き出しで始まるジョセフ・シュワブ（Schwab, J.）による「実践的であること（*The Practical*）」（1969年）は、カリキュラム開発論の新しい

い地平を拓いていく契機となった。この論文でシュワブは、タイラー原理を直接的に批判するどころか、自身が主張する「理論的であること」から「実践的であること」への転回の必要性（多彩な人々による折衷的なカリキュラム開発の必要性の主張）は、タイラー原理にすでに内在していたと述べている（Schwab, p.23）。さらに、タイラーも「実践的であること」が自身の考えと親和性があることを認めている（Tyler, 1984）。しかしながら、この論文で提案された「熟考（deliberation）」や「折衷主義的であること（the eclectic）」などの概念は、タイラー原理批判を含意するものとして引き取られる傾向にあった。

1970年代に「実践的であること」に影響を受けつつ、ポスト・タイラーのカリキュラム開発論を模索した人物に、ウィリアム・リード（Reid, W.）やデッカー・ウォーカー（Walker, D.）がいる。彼らの批判は、タイラー原理が含みもつ真空状態における単線型の合理主義に向けられた。リードは、タイラー原理が、教育目標を分析的に細分化することを提唱したわけではない、暫定的で穏健な提案であったことを認めつつも、カリキュラム開発上の制約や合意形成の問題を見過している点を批判する。そして彼は、ある特定の制約を伴う状況下で議論や省察の浮き沈みを通して解決策を模索することが求められていると説く（Reid, 1975）。

ウォーカーは、タイラー原理に代表される合理主義の「古典的モデル」に対するオルタナティブとして「自然的モデル」を提案する。紙幅の関係でこのモデルについて詳説することはできないが、自然的モデルは、実際のカリキュラム開発のプロジェクトにおけるプロセスを観察して経験的に導き出されたものである。その特徴は、規範的ではなく記述的モデルであること、教育目標の特権化を退けて手段の1つとして降格させること、シュワブに依拠して「熟考」を通したデザインと意思決定のモデルであることなどが挙げられる。

以上のように、1970年代は、タイラー原理を批判的に問い直し、オルタナティブを模索した時期でもあった。しかし、教育目標のタイミングと設定や、学習経験の選択と組織、教育評価のあり方などに関する、タイラー原理に内在する課題は浮き彫りになったものの、これに取って代わる水準のモデルが提案されてきたわけではない。自然的モデルも実際のカリキュラム開発

のプロセスを説明する上では役に立つが、「では、どのようにカリキュラムを開発すべきか」という現場の切実な問いに十分応えられる規範的モデルとは言えない。

批判的教育学や再概念主義による解体作業ならびに教師教育論へのシフトが後押しとなって、現在どうやら欧米ではカリキュラム開発のあり方に関する研究は、アカデミックなカリキュラム「研究」の外部に追いやられている傾向にあるようだ。しかし、研究の衰退は必要性の後退と同義ではない。世界的にスタンダード化が進行する中で、教師たちからカリキュラムを自前で開発すべきだという発想や意志が奪われつつあるこの時代において、今こそタイラー原理とその批判の遺産を継承し、実践を踏まえつつ理論的にカリキュラム開発論を再検討・再構築すべきではないだろうか。

参考文献

- Hlebowitsh, P., “Foreword,” In Tyler, R., *Basic Principles of Curriculum and Instruction*, The University of Chicago Press, 2013, pp.vii-xii.
- Pinar, W., “Plagiarism and “Tyler Rationale”,” *Journal of the American Association for the Advancement of Curriculum Studies*, Vol. 9, 2013, pp.1-13.
- Reid, W., “The Changing Curriculum: Theory and Practice,” In Reid, W. & Walker, D. (eds.), *Case Studies in Curriculum Change*, Routledge, 1975, pp.240-259.
- Schwab, J., “The Practical: A Language for Curriculum,” *The School Review*, Vol. 78, No. 1, 1969, pp.1-23.
- Tyler, R., “Personal Reflections on the Practical 4,” *Curriculum Inquiry*, Vol. 14, No. 1, 1984, pp.97-102.
- Walker, D., “A Naturalistic Model for Curriculum Development,” *The School Review*, Vol. 80, No. 1, 1971, pp.51-65.
- 澤田稔「カリキュラムの批判的研究」日本カリキュラム学会編『現代カリキュラム研究の動向と展望』教育出版、2019年、pp.348-355。
- 米村まろか「curere：『カリキュラム』に潜む主観的行為の探究」『カリキュラム研究』第3巻、1994年、pp.81-92。

（日本学術振興会特別研究員・博士後期課程）

受理 2022年2月26日